

わたしの戦争体験～戦後五十周年に寄せて

八女郡矢部村

高山 節雄

自分達には青春時代はなかった。ただただ、若い学童の身ながらひたすらに必勝を胸に秘め、黙々と勤労奉仕に従事し、子供心に一度でも戦争に敗れると言うことは考えたことはなかった。もし敗れるような事態が生じても必ず神風が吹き勝利に導くと信じ、お互いに頑張ったものだった。

戦後50周年を振り返り、じっと目を閉じて戦時下の色々の出来事、思い出を思い浮かべると走馬燈のように脳裏を駆け巡ると共に、今日戦争のない平和のありがたさ、命の尊さがしみじみと感じられる思いがする。それは、あの悪夢のような悲惨な戦争で尊い命を投げ打って国のため戦場に散った若人を始め、多くの犠牲者の霊に対し哀悼の意を捧げると共に、その死を無駄にすることはできないと思うものである。また、戦場において体験された方は申すまでもなく、国内において戦時下、困難な生活を体験された方等、今日戦後50周年を迎えるすべての戦争体験者によって、平和のありがたさと命の尊さを改めて戦後生まれの戦争を知らない若者に継承して行く事が大切だと思う。

自分達の小学校卒業から高等科2年までの時代は、太平洋戦争以前から戦時下にあって、そのすべての教育の中に軍国主義的なものが入り入れられていたように思う。小学校1、2年生頃から、大きくなったら何になると尋ねると、兵隊さん、女の子は看護婦さんと言うように憧れでもあったように思う。兵隊さんになって戦争に行き、御国のためならいつ死んでもよろこんで一命を捧げるということのみで育って来た。そのようなことで自分も当時、現在の中学生くらいではなかったかと思う。海軍に憧れて志願したが、体も未だ基準に適していない事由で失格となったことを記憶している。友達の中で2、3名は志願兵として兵役歴がある者もいるが、徴兵検査によつての兵役歴はなかった。

昭和16年12月8日、太平洋戦争開戦と同時に各地での戦果は華々しいものであったが、物量を誇る米英両国相手のこと、次第に戦況は敗色のきざしが見え、ついに昭和17年4月18日、日本本土空襲が始まり、以降東京を始め大都市と、特に軍需工場が空爆目標とされた。それ以来連日のように空爆が行われ、我が里の上空を銀翼を輝かせB29爆撃機の大編隊が通り過ぎるのをただ無念の思いでどうする事もできず見入るばかりであった。空襲に備え、防空壕作りを家庭や集落ごと等で行った。田舎のため爆弾投下はなかったが、数件の投下物はあったように記憶している。夜は灯火管制で外部に灯が洩れないよう布等で空襲に備えた。また、当時は電灯も節電のため、ローソク送電と言って線香の火のように弱い光のため、特殊の電球を使って光を強めていた。当時子供、婦人については空襲に備え防空ズキンを使用した。

戦時下における出征兵士の家庭には農繁期に田植、稲刈、麦蒔、麦刈等と奉仕作業をしていたが、戦況が厳しくなるにつれ年老いた男性も徴兵され、農業は人手不足となって来た。この

ため一般農家のあらゆる穀物類の取り入れ等についても奉仕作業を行った。

自分達の戦時下の学校名も国民学校と改称された。高等科1年～2年は平常ならば体も伸び盛りであろうが、戦時下の食糧事情は最悪で、厳しい食糧難の中の必要物資の搬出（軍需用品の燃料として使用されていた木炭ガスで動いていた自動車に使用される木炭を、奥山から学徒動員によって小さい体で2俵3俵と背負い、数kmの山道を車の入る所まで運ぶ事）は大変つらい思い出があり、忘れない。また、山林の杉の皮が家屋の屋根に現在の瓦等の代わりに使用されていたため、その搬出作業も木炭同様に行われていた。

この様に毎日が厳しい労働で、伸び盛りの体を抑えながら無理をしているため、特に昭和一桁生まれは、身長も伸ばず生命も短いということを耳にすることがあり、戦時下苦勞を共にした学友の中に他界した者数人がいる。学校用具は、1時間か2時間の授業の他はほとんど作業のため教科書も数少く、作業用具の鍬や鎌、運搬用の背負い荷尾といった物を持って行く日が多かった。なお、学校の農園に一般の農家から借受けて植えていたのが「ヒマの油」（飛行機の燃料となる植物の実）であった。他に燃料となるものとして、松の木から取る松根油、それと飛行服に使用するためのススキの穂も採集していた。作業に向かう途上においては、鍬などの農具をかついで、若鷺の唄（日の丸鉢巻しめ直し、ぐっと握った操縦桿）をよく唄ったもので、戦勝の意気は高らかであった。

戦況は刻一刻と不況に陥る中で、銃後においても日増しに物資不足と食糧の不足が深刻となって来た。第一に食糧難の危機が迫った。主食の米が少量の他、コーリャン、短めん、トモロシの粉等が配給されていた。当時家族も多かったため、少ない米では足りず、唐芋、里芋はもちろんのこと、唐芋のクキは主食として毎日のようにツルを切り取り、畑は芋ツルが無くなるように食糧にしたものだった。野草においても食べられるものはすべての物を口にした。主食の米に代わる芋類も耕地が少いため限界があり、遠く熊本県の肥後の方へ高い山々を二つも三つも越えて買い求めに出向き、精一杯の芋を背負いながら、大人から小人まで朝暗いうちから出て、夕方暗くなって帰ったことも何度かあった。更に当村の専業農家は数少なく、ほとんどの世帯はこうして毎日のように買い求めに行き交うため、山道もその当時は磨けていたものである。現在は新しく道路も開通して短時間で行けるようになり、当時の山道は今は全然なくなっていると思う。今考えるだけでも戦時下であの食糧難の苦しみは忘れられない。背中一杯の重量の芋を何十kmとも知れぬ山道を登り、谷を渡り飢えをしのいで生き延びて来たことを思い浮かべるとき、身の引きしめる思いがする反面、現在の食糧事情と比較するとしみじみ戦争のない平和のありがたさを感じると共に、いつまでこのような食糧の豊富な時代が続くだろうかと不安な気もする。

当時の品不足も食糧に次ぐ深刻な事であった。足の先から頭まで何一つとも足る物はなかった。学童の服を作るため、当地方で野良に自生のかっぱん草の皮を原料として、天日で乾かし出していた。靴の代わりに毎日のようにわら草履を作っていた。また、戦時下では衣料キップが交付されていたのでこれで購入し、限られた点数を使用したものであった。自転車のタイヤ

等もなく、空気の入っていないダゴゴムが使用されていた。冷蔵庫等なく、竹籠で屋外につるす。また、飲み物は池や谷川の流れを利用、工夫していた。冬期は主として木炭火鉢を使用していた。戦争の末期、昭和19年頃はお菓子等は全くなく、唐芋、飴など珍しい位で、芋や干柿、自家製の色々のものが子供のオヤツとされていた。塩については岩から採取した岩塩を、砂糖については代用に化学製品のミツゲン、サッカリン等が市販されていた。

おわりに村内150余柱の戦没英霊に対し深く哀悼の意を捧げ、御冥福を祈るものである。